

薬の影響を考える 臨床検査値ハンドブック 第2版

昭和大学横浜市北部病院内科系診療センター 教授 木村 聡(監修・編集)
北陸大学薬学部長・教授 三浦雅一(編集)

浜松医科大学 臨床検査医学

前川真人

近年、臨床検査はEBMにおける客観的な指標として、その重要性がますます高まってきている。国際臨床化学連合(IFCC)のホームページにも診療カルテにおける客観的な指標の94%を占め、臨床判断を行う上で60~70%の影響力を持ち、診療ガイドラインの37%に関与していると記載されている。現在は検査依頼をすれば確実に客観的な結果が出てしまうため、その値が間違っていると(患者の病態を表していないと)、患者診療にとって大きな誤判断につながってしまう危険性が高い。

臨床検査値の異常は病態によるものばかりではない。分析前、分析、分析後に分けて考えると、分析前としては検体の取り方、前処理法、分析までの保存条件などによる影響がデータの異常につながることもあるし、分析過誤も、また分析後の結果の送信ミスなど、種々の検査にまつわる原因がありうる。また、患者の生理的変動や食事や運動などによる影響、そして病態にも関係するが治療による影響も考えておく必要がある。このうち、薬剤による影響は大きいと推察される。薬剤による影響のうち、人体への直接的な作用による結果として肝障害が生じるというのは病態とも言えるが、測定系への影響や薬剤中のコンタミなどは病態とは関係なく、検査診断を誤った方向に導く恐れのある注意すべきものである。

しかしながら、薬物による臨床検査への影響に関する書籍は少なく、参考にできるものはあまりなかった。本書籍はそのような点に着目して書かれたものと考えられる。何せタイトルに「薬の影響を考える…」とあるのだから、各項目に薬剤影響の欄があり自然に目が行くように配慮されており、簡潔に記載されており、忙しい医療従事者が一目見て理解できるように工夫されている。

他にもおもしろい工夫がある。まず、表紙をめ

くと「よく用いられる臨床検査値一覧表」として、電解質や脂質など、検査項目群ごとの基準範囲と掲載ページが、そして裏表紙をめくと〔主な疾患別にみた検査項目索引〕が掲載されている。どちらからでも掲載ページに簡単に飛べるように作成されているわけである。もちろん、巻末に通常の検査項目の索引はもちろんのこと、薬剤名の索引があって薬剤名からどんな検査値に影響を及ぼすかもわかる仕組みになっている。次に、「注目」として、先述したような病態以外で検査値に影響を与える因子についての説明が本文中に挿入されている。さらに、関連する内容としてチャートやコラムが随所に盛り込まれており、診断の流れや、ちょっと詳しい解説などが掲載されている。そして、今回の第2版では、最新情報にアップデートされ、遺伝子検査と薬物検査の項も新設されて、より使いやすくバージョンアップされている。

このようなアイデアに富んだ書籍は、木村先生、三浦先生ならではのものであり、なおかつ分厚いものにはなっておらず、非常にハンディである。医師ばかりでなく、薬剤師、看護師、理学療法士、栄養士などの医療従事者に使っていただきたい。また、臨床検査技師がこれから検査相談を行うときには、さりげなくチェックするための書籍として活用されることをお勧めする。



●B6/頁 327/2014 年
定価：本体 2,800 円＋税
[ISBN978-4-8407-4616-8]
株式会社じほう 刊